『東京下町SFアンソロジー（仮）』のコンセプト

2024.2.20

●対象となる作品
以下のコンセプトに則った、東京の下町、または架空の下町を舞台にしたSF短編小説。

※依頼原稿との内容の重複を避けるため、東京の下町を舞台にする場合は、神田、日本橋、京橋、新橋、芝のエリアを舞台としたものとさせていただきます。

※※エリアや下町の範囲等について疑問がある場合には、お手数ですが下記のメールアドレスまでお問い合わせください。
info@virtualgorillaplus.com

●テーマ：「下町とはSFの証明なり」

　東京のアンソロジーって……やりづらくないか？

　多摩地域や島嶼部は別として、東京には「東京にしかないもの」があまりない。まったくないわけではないのだが、東京在住民は観光のアテンドをしてくれといわれると、たいてい頭を抱えると思う。
　だって東京にあるものって、すぐに他の地域に進出しちゃうし、観光地特有の特別感がないし、比較対象が外国の大都市だから日本人には全く珍しくないし、特徴がないのが特徴というか、東京にあるものは全部普遍化してしまうというか……筆者斧田は地方出身者なのでそういう東京のちょっと傲慢な悩みには、お前が日本の代表ヅラすんなと思ったりもするのだが、でも実際に頼まれると――うん、困る。
　住んでいるとわかることってあるんですよ。東京の太い道を歩くと、だんだん町が変わっていくことが、建物が高くなったり低くなったり、古くなったり新しくなったり、南北に規則正しい区画だと思っていたらいつの間にか曲がっていたり、そしてそうなっている理由を調べるとちゃんと歴史があって、その上に人が生きていたということがわかるようになっている。町の境目はよく目を凝らさないと見えないかもしれないけど、踏み越えれば確かに空気が変わったと感じる瞬間がある。
　でも住んでないとこれってわかんないんですよね。そういうときにわかりやすいのが、下町です。

　義理人情に代表される江戸っ子文化が今も残る下町は、海外では"Shitamachi/Old Tokyo"と親しまれている。ごちゃごちゃとした町並み、猫が住み着く細い路地、おせっかいな住人、商店街の賑わい、お祭り、懐かしい感じ……浅草浅草寺のような古くからの観光地はもちろんだが、いつのまにか観光地になっていた谷根千、スカイツリーの開業で脚光を浴びた押上、再開発の進む清澄白河に茅場町、日本橋、と年々観光地としての人気は高まり、「下町」のイメージもかなりメジャーになってきた。
　ところがこのような下町はわかりやすくパッケージングされた観光地向けの顔であって、本当の下町というのはあまり評判がいい場所ではないのである。

「東京だけど東京じゃない」、「災害に弱い」、「治安が悪い」「足立ナンバーには近づくな」「老人しかいない」「なんもないから行かないかなぁ〜」「台風来たら水没するんでしょ？」
まぁ……否定はしないですよ、否定は。ハザードマップをみたら真っ赤だし、観光地というには見どころが点在しているし、老人は本当に多い。めちゃくちゃ多い。しかも地元の人にとって見れば「なんか最近観光客多いね」「下町？　ふうん……もの好きがいたもんだね」てなもんで、観光地としてパッケージングすればするほど実態とはかけ離れていくのがもののさだめとすら言えそうな状況。でも……好きな人は好き、愛着がある人はある、他の場所に移ってもいつの間にか戻ってきてしまう、なんか居心地がいい、そういう場所であるのは確かなんだよなぁ。

そんなことを考えていた時、ふと私は思った。なんか……下町ってSFと似てない？

牽強付会のそしりは受けましょう。万人に愛される――とは絶対に言えない、どころかどちらかといえば嫌われてすらいるのがSFというジャンルだ、と私は思っている。SFに限ってはなぜか嫌いだと公言する人は少なくないし、難しそうだからちょっと……とか読んだことありませんとか、SF作家になろうと志す人でさえ口にすることのあるジャンルなのである。なぜなのか？　わからないが、SFというものは、なんというかこう、そういう扱いでいいと思われているんじゃないか？　う〜ん、東京のようだ。
最盛期が60〜70年代だったので、ファンの高齢化が激しいいっぽうで、近年は春を迎えたとか夏が来たと言われているように新人作家が増え、新しい読者が増え、SFジャンルを冠した出版が顕著に増えている。これによりSFオヂによる「これはSFじゃない」ならぬ「これは新しいSFじゃない」論争がたまに勃発してクソ面倒だったりするのだが、新しい人が流入しているというのはすなわち、近年、何らかの原因によってイメージが回復され、「SF」がある種パッケージ化されたということではないだろうか。同じことが東京の下町でも起こっている。古さを「懐かしさ」と言い換え、口の悪さを「江戸っ子気質」と換言し、災害に弱い木造住宅密集エリアを「猫の住み着く細い路地、ごちゃごちゃとした町並み、商店街の賑わい……」とするアレである。そんなに嫌いじゃない（もちろん世界の町工場を最新テックの創出拠点にするようなちゃんとした取り組みもある）。
嫌いという人は多くいるのに、熱烈に愛する人もいる。SFだから読む、SFだから好きだというファンがいる。そんなSFの状況がなんだか下町とかぶるような気がするのだ。

と、このように牽強付会な論を張ってみたが、実際のところ地方都市と比べたとき、東京下町はだいぶ平凡な存在であるだろう。どこの都市にも負の側面はあり、負の遺産はあり、すべてを消し去ることはできない。過去に光を当て、その街の特色を出そうとする試みは全国各地で行われていることだ。
しかし、最初に述べた通り、下町があるのは東京なのである。東京＝標準あるいは東京＝日本という錯覚によって特徴を奪われたこの特殊な土地において、こういった平凡さこそが特異的なのである。普遍性を持つことが特異的となる東京という都市の奇妙さ、そして普遍性をあたかも特別なこととして語り得るのは東京下町にしかできないことではないだろうか。そして、その構造はやはりSFに通じている。
SFはいっけん、奇妙な現象や独特な世界を提示して人々を驚かせようとしているようにみえる。しかしその奥底には普遍的なメッセージや人間性が備っていることに議論の余地はない。むしろ風変わ

りな世界観こそが、普遍性を際立たせるところにSFとしての面白さがあるといえよう。下町の魅力はそんなSFの面白さに類するものなのではないだろうか。
　もしそうであるなら、SFは下町によって帰納的に証明されるかもしれない。

　というわけで、東京下町をテーマにしたSFアンソロジーを読んでみたいと思った。「SFも下町も私がいないと寂しいと思います」という強火な愛で、帰納的にSFを証明する作品が集まれば良いと思う。

トウキョウ下町SF作家の会　斧田小夜